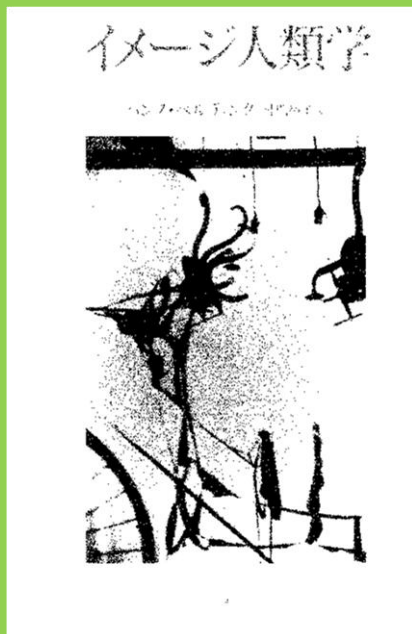


シンポジウム

# ノマドとしてのイメージ

## ーハンス・ベルティンク『イメージ人類学』再考

主催:立命館大学国際言語文化研究所



2015年3月16日(月)13:30-18:00

立命館大学衣笠キャンパス アート・リサーチセンター 多目的ルーム

《参加費・事前申込不要》

今日、焦眉の問題であるイメージの存在をめぐり、ハンス・ベルティンク(Hans Belting, 1935~)は「イメージ人類学」を提唱する。その理論の中心をなすのは、あらゆるイメージ現象を支えるイメージメディアー身体の三項関係であり、この観点に立ち、太古から現代に至るまで歴史上現れたイメージが分析される。なかでも注目すべきは、死者崇拜の像から写真作品まで、イメージを生み出し、受容する身体機能の重視である。『イメージ人類学(Bild-Anthropologie)』の初版からすでに10年以上経たが、著者の理論は2012年、第33回国際美術史学会において特別講演を依頼されるなど、いまなお広く国際的な注目を集めている。本シンポジウムではさまざまな専門領域の研究者が集い、ベルティンクのイメージ学の諸側面について再考する。

- 13:00- 受付  
13:30-13:40 開会 シンポジウム主旨説明  
13:40-15:10 吉田 憲司(国立民族学博物館):人類学からみた『イメージ人類学』  
加藤 哲弘(関西学院大学):ヴァールブルクとイメージ人類学  
15:10-15:20 休憩  
15:20-16:50 前川 修(神戸大学):イメージ人類学の写真論  
仲間 裕子(立命館大学):イメージ人類学から「グローバルアート」へ  
16:50-17:00 休憩  
17:00-18:00 パネル・ディスカッション

司会:竹中 悠美(立命館大学)

【お問い合わせ】「風景のイメージとその人類学的諸相研究会」事務局(立命館大学国際言語文化研究所内)  
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 TEL:075-465-8164 MAIL:indscp21@st.ritsume.ac.jp